

[報告] 第36回歴史地震研究会(徳島大会)参加記

名古屋大学大学院環境学研究科* 平井 敬

A Report of the 36th Annual Meeting in Tokushima

Takashi HIRAI

Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University,
Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya, 464-8601 Japan

§ 1. はじめに

2019年9月21日(土)から23日(月)にかけて、徳島県徳島市の徳島大学常三島けやきホール(写真1)において、第36回歴史地震研究会(徳島大会)が開催された。台風17号が近づいていたが、直撃は免れ、巡検も含めて全日程を無事に終えることができた。この直前、9月16日から20日にかけて、京都市において日本地震学会の秋季大会と日本地震工学会の大会が相次いで開催されていた。筆者はこれら2つの大会に続いての参加で、長期の出張であった。会場を見回すと、他にも同様の方が何人かいたようである。今回、残念ながら筆者自身の研究発表を行うことはできなかったが、3日間の研究会に参加して見聞したことを報告する。



写真1 会場となった徳島大学常三島けやきホール

§ 2. 研究発表会

3日間にわたり、39件におよぶ口頭発表と18件のポスター発表が行われた。

口頭発表は、歴史地震全般、九州・沖縄地方の地震と諸現象、南海トラフの地震と諸現象、関東地方の地震と諸現象、東北地方の地震と諸現象、四国地方の地震と諸現象、および中国・近畿・中部地方の地震と諸現象の7つのセッションに分けて行われた。歴史記録を丹念に読み解いた研究に加えて、各地に残る石碑や地震・津波被害の痕跡の調査、現代の微動観測や津波シミュレーションとの比較を行った結果など、多岐にわたる研究の成果が発表された。また、近代の地震については、写真や映像資料に関する調査も行われていることが紹介された。防災教育やデータベースなどのキーワードで特徴づけられるような研究発表も複数なされた。今回、開催地が徳島県



写真2 ポスター発表コアタイムの様子
(室谷智子氏提供)

であることもあってか、四国地方の地震のセッションにおいては、5件中3件が徳島県の津波被害や土砂災害に関する研究発表であった。

ポスター発表については、2日目から3日目の昼

* 〒464-8601 名古屋市千種区不老町
電子メール: hirai.takashi@nagoya-u.jp

にかけて会場の半分のスペースを使用して掲示され、2日目の午後にコアタイムが設けられた(写真2)。非常に盛況で、時間中ほとんど間断なく議論を交わしていたところが少なくなかった。ときには、口頭発表のセッションの合間の休憩時間にも議論が行われていた。

§3. 公開講演会

1日目の午後には、「過去の南海地震に学び、次の南海トラフ巨大地震に備える」と題して、公開講演会が行われた。非常にたくさんの来場者があり、この地域における南海トラフ巨大地震や津波に対する関心の高さがうかがい知れた。2時間強にわたり、徳島県立文書館の金原祐樹氏による「南海地震の記録を残すー徳島県立文書館の活動ー」、牟岐町防災サークル・美波町立由岐小学校による「小中学生による歴史地震を活用した地域防災活動」、石橋克彦氏による「南海トラフ巨大地震とは何か、どう備えるか」の3題の講演が行われた。特に、牟岐町防災サークル・由岐小学校を代表して登壇した中学生たちからは、地域と一体となった防災・街づくりの取り組みが紹介され、会場から惜しめない拍手が贈られた。

§4. 功績賞授与式と総会

2日目の午前のセッション終了後に、功績賞の授与式と総会が行われた。今回は、神戸大学名誉教授の石橋克彦先生に功績賞が贈られることとなり、松浦会長より手渡された。その後、総会が開催され、会則の一部変更等についての審議がなされたが、詳細は省略する。

§5. 懇親会

2日目の夜、徳島大学生協食堂へ場所を移して、懇親会が開催された。はじめに記念撮影を行い、松浦会長と功績賞を受賞された石橋先生のご挨拶があった。しばし歓談し、懇親会が中盤に差し掛かったころ、徳島県阿波踊り協会所属の「うずき連」の方々が登場し、阿波踊りを披露してくださった。はては懇親会参加者も一緒になって阿波踊りを楽しんだ。最後に、伊賀忍者に扮した盆野行輝氏(次期行事委員)より、来年度の伊賀上野大会開催へ向けた決意が披露され、懇親会はお開きとなった。

§6. 巡検

3日目の午後から、バスに乗って、徳島市の北隣に位置する板野郡松茂町をフィールドとする巡検に出



写真3 中喜来春日神社



写真4 敬諭碑

発した。案内として、松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館学芸員の菅野将史氏が同行してくださった。

昼食の後、まず中喜来春日神社(写真3)の境内にある敬諭碑(けいゆひ、写真4)を見学した。漢和辞典で調べると、「諭」は「あふれる」または「変化」の意を表す字である。配布された資料では、「敬諭碑」を「天変地異を畏れつつしむ碑」の意味としている。1854年安政南海地震に関係する碑として徳島県では最北に位置するものであり、揺れによる家屋の倒壊と火災、津波による田畑の浸水、さらには流言飛語や盗賊による二次被害などの様子が克明に記されている。



写真5 集合写真(山中亮一氏提供)

次に、松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館を訪問した。ここでは、吉野川河口の三角州に位置する松茂町の水害との闘いの歴史について、展示を見学した。その後、野外に設置された舞台において、この地に花開いた伝統芸能である阿波人形浄瑠璃「傾城阿波の鳴門 順礼歌の段」を鑑賞した。夕方、徳島空港、徳島とくとくターミナル、徳島大学、徳島駅の各所へ帰着し、順次解散となった。

§7. おわりに

歴史地震研究会としては、1991年の第8回を徳島県海部郡海南町(現・海陽町)、1994年の第11回を高知県須崎市で開催して以来、実に25年ぶりの四国での開催であった。

筆者は過去に何度か徳島市を訪れたことがあるが、いずれも短時間の滞在だった。今回、徳島市および

松茂町で3日間を過ごし、あらためてこの地域が吉野川河口の三角州地帯に形成された低地であることを体感した。洪水はもちろん、地震や津波も含めて、災害と闘い続けてきた土地であるが、一方、阿波踊りや人形浄瑠璃のような素晴らしい伝統文化を育ててきた魅力溢れる地域でもある。こうした自然と人々が織りなす歴史に触れることができるのも、歴史地震研究のおもしろさのひとつであると思う。

次回の第37回歴史地震研究会は、三重県伊賀市で開催されることが決まっている。奈良県東部の宇陀市で育った筆者にとって、東隣にある伊賀地域には幼少期からなじみがある。たくさんの研究発表と巡検を心待ちにしつつ、自身も研究発表を行えるように努力したいと思う。

最後に、本大会を円滑に運営して下さった行事委員会の皆様に感謝申し上げます。